

Title	デンマーク語 その語順と文体についての一考察 : カーレン・ブリクセンの作品を中心として(3)
Author(s)	岡田, 令子
Citation	大阪外国語大学学報. 50 p.81-p.108
Issue Date	1980-09-29
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80810">https://hdl.handle.net/11094/80810</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# デンマーク語

## その語順と文体についての一考察

——カーレン・ブリクセンの作品を中心として (3)

岡 田 令 子

### DANISH: ITS WORD-ORDER AND HOW IT EFFECTS ON CREATING STYLES (3)

Reiko Okada

This is the third part of Karen Blixen studies on her style: Part (1) is in the IDUN IV (1978, pp. 19—40), and part (2) in JOURNAL OF OSAKA UNIV. OF FOREIGN STUDIES, 1980, pp. 69—90.

この小論は先に同じ題目で発表した小論(1)(2)に続くもので、今回はカーン・ブリクセンの報道記事をテキストとし、その文体を考察したものである。

#### 内容目次

1. テキスト原文及びその和訳
2. テキストについて
3. 分析及びその考察
4. 添付グラフ 表Ⅰ 『アフリカの農園』文頭より
  - Ⅱ 同 “翼”より
  - Ⅲ 私信
  - Ⅳ 報道記事
  - Ⅴ M・A・ゴールドシュミットより
  - Ⅵ H・キルクより
  - Ⅶ S・E・ラスムツセンより
  - Ⅷ “子供”より
5. 作者年譜

## 1. テキスト原文及びその和訳

### BREVE FRA ET LAND I KRIG

#### FORORD

I Foraaret 1939 fik jeg Tagea Brandt's Rejselegat, og haabede ved dets Hjælp at kunne virkeliggøre en gammel Drøm.

Jeg vilde rejse med Pilgrimmene til Mekka, sammen med Farah Aden, som i tyve Aar havde været min Tjener i Afrika, og med hans gamle Moder hjemme fra Somaliland, som jeg aldrig havde set, men som gennem Farahs bestandige Omtale var blevet en gammel Bekendt.

Farah og jeg havde i mange Aar set frem til denne Pilgrimsfærd. Naar vi blev rige, sagde vi, skulde vi rejse til Mekka. Men vi blev aldrig rige.

I Løbet af Sommeren fik jeg af den Arabiske Legation i London Løfte om et Introduktionsbrev til Ibn Saud, og tænkte mig da, at Rejsen var nogenlunde sikret. Maaske vilde jeg kunne formaa Ibn Saud til at give mig en Eskorte, og Farah og jeg vilde købe arabiske Heste og forbinde Valfarten med et Strejftog i det lykkelige Arabien.

Men det trak op til Torden here Verden over, og jeg forstod at jeg hellerikke denne Gang vilde naa frem til Mekka.

Da Krigen brød ud d. 1ste September blev Bevidstheden om Indespærring mig uundholdelig. D. 3die September kørte jeg til København, gik op paa „Politiken“s Kontor og bad Redaktør Hasager om at give mig et Arbejde som Journalist, af hvilken Art som helst og hvorsomhelst udenfor Danmark. En saadan Opgave vilde sikre mig fri Adgang til de Lande, hvis Døre ellers var saa strengt lukkede.

Jeg sagde til Redaktør Hasager at jeg paa ingen Maade af Naturen var Journalist. Jeg havde ingen Indsigt i Politik og ingen politisk flair. Men jeg var et ærligt Menneske, og maaske kunde ogsaa en fordomsfri Lægmands Optegnelser fra en politisk mægtig bevæget Tid engang i Fremtiden faa en Slags Interesse som document humain.

Nogen Tid senere skrev Redaktør Hasager til mig, at Politiken, sammen med et norsk og et svensk Blad, vilde engagere mig til at rejse en Maaned til London, en Maaned til Paris og en Maaned til Berlin, og til at skrive fire Kroniker fra hver By.

Det var mere end jeg havde kunnet haabe.

Jeg havde Venner og Bekendte i Regeringen i London, derovre vilde Opgaven, mente jeg, blive plain sailing. Jeg havde gode Betingelser for at kunne løse den ogsaa i Paris.

Men jeg kan ikke tale tysk, og jeg havde ingen Forbindelser i Det Tredie Rige. Efter nogen Betænkning bestemte jeg mig derfor til først at tage til Berlin.

For at faa mit Pas og mine Papirer i Orden havde jeg nogle Samtaler med Minister Renthe-Finck, og fortalte ham da ogsaa at jeg fra Berlin skulde videre til London og Paris.

Jeg kom endelig afsted d. 1ste Marts 1940, og blev i Berlin til d. 2den April.

Der blev i Berlin vist mig en Interesse, som i højeste Grad overraskede mig selv, og som skyldtes, at man der vidste Besked med de videre Planer for min Rejse.

Da jeg fra Flyvepladsen kom ind paa Hotel Adlon, ventede allerede to Doktorer fra Propagandaministeriet paa mig.

## 戦時下のある国からのレポート

### 序

1939年に私は「タエア・ブラント旅行費」の給付を受けたので昔からの夢を実現したいと思っていた。

アフリカで20年間私の執事だったファラーとその母親と一緒に巡礼に加わってメッカに旅立ちたかった。故郷のソマリランドにいる彼の母親には会ったことはなかったのだが、よく話を聞いていたので古くから知っている知人のようであった。

ファラーと私は長年この巡礼の旅を楽しみにしていた。金持ちになったらメッカへ旅しようと口にはしていたが、私たちは結局金持にはならずじまいであった。

夏の間にロンドンのアラビヤ公使館から、イブン・サウド王への紹介状をもらう約束をし、それでこの旅行が何とか実現すると思っていた。イブン・サウドが多分私たちに護衛を1人つけてくれ、ファラーと私はアラビヤ馬を買って聖地巡礼と同時に南部アラビヤ<sup>(1)</sup>の各地をぶらりと訪ねてみようと思っていた。

けれども世界中を震撼させるようなことが起きて、今度もまたメッカまでは行けそうもないことがわかった。

第2次大戦が9月1日に勃発した時、閉じ込められるという思いがして私には耐えがたかった。そこで9月3日私はコペンハーゲンまで車でゆき、「ポリティッケン」新聞社の事務所を訪ねてハサー編集長に、デンマークの外ならどこでもいいし、どんな仕事でもかまわないから、ともかく記者として働かせてくれるように頼んだ。記者の仕事となれば、外国人を入れない国々へ私が自由に入ることが保証されるだろう。

どうみても自分は生来はジャーナリストではないがと私はハサー氏に言った。私は政治への洞察力も、政治に対する勘といったものもない。しかし、私は正直な人間だし、政治的に大変動のある時代の、偏見のない素人の記録でも、多分いつか将来人間の記録<sup>ヒューマン・ドキュメント</sup>として、ある種の関心を得ることができるのではないかといった。

しばらくしてから「ポリティッケン」社と、ノルウェーとスウェーデンのある新聞社が、私を

ロンドンに1ヶ月、パリに1ヶ月、そしてベルリンに1ヶ月派遣して、各都市からそれぞれ4編の特別記事を書かせるということで採用するとハサヤー編集長が返事をしてきた。

これは私が思ってもみない程よい話であった。

ロンドンでは、政府に友人や知人がいたので、行きさえすれば仕事はとんとん拍子で進むと思った。パリでも仕事を片づけるのにはいい条件がそろっていた。

だが私はドイツ語は話せないし、第3帝国にはこれという知り合いもない。しばらく考えた末、先ず、ベルリンへ行く決心をした。

パスポートや書類を整えるために、レンター・フィンク（ドイツ）公使と数回にわたって話し合い、私は彼にベルリンから更にロンドンとパリに行くのだと告げた。

やっと1940年3月1日に私は出発し、ベルリンに4月2日まで滞在した。

ベルリンでは私に関心が示され、私自身とても驚いたのだが、そこではそれ以後の私の旅行計画について知っていたからだった。

飛行場からアドロン・ホテルへ着くと、既に宣伝省のおえら方が2人、私を待っていた。

## 2. テキストⅣ「報道記事」について

‘Breve fra et land i Krig’〔戦時下のある国からの記事〕（1940年執筆）のエッセイから、最初の2頁（*Essays*, 118—9）を取って、テキストⅣとした<sup>(2)</sup>。

この文の最初に著者 Blixen 自身が説明しているように、第二次大戦が始まって約半年後、彼女は“ポリティッケン”新聞社の特派記者としてベルリンに行き、第3帝国を主題にしたレポートをまとめた。それが序と4つの記事を含む報道記事として前記のように名づけられたのである。

ベルリンに滞在（1940年3月1日～4月2日）し、帰国後1週間をかけてちょうど清書し終えた日、（1940年4月9日）中立国であったデンマークもドイツ軍の占領下に入ったため、この記事は新聞に掲載されずじまいであった。その後原稿は忘れられていたが（cf. *Essays* p. 120）、文学雑誌‘*Heretica*’（1948—53<sup>(3)</sup>）が新しく発行されることになり、その後少しも手を加えることなくその第1年度の第4号と5号（1948）に分けてこの記事が発表され、実に8年を経過し、初めて日の目を見ることになったのである。Blixen の死後3年して（1965）、彼女の *Essays* が出版された折、この報道記事も他の7つのエッセイ<sup>(4)</sup>と共にその中におさめられた。

このように、もともと新聞の特別記事として書き下された作品は、Blixen の他の創作作品—短編—とはジャンルを異にし、目的や読者層も自ずから異なるものであろうし、また彼女が家族に宛てた個人的な手紙とも性格を異にするとと思われる。それ故、文体検討をなすに値すると思わ

れるので、ここにテキストの1つとしてとりあげた。

それでは以下、このテキストNを分析し、考察を加える。

### 3. 分析及びその考察

#### BREVE FRA ET LAND I KRIG FORORD

- (1) \* I Foraaret 1939 fik jeg Tagea Brandt's Rejselegat, og haabede ved dets Hjælp at kunne virkeliggøre en gammel Drøm.

〔序 1939年の春、私はタエア・ブランドの旅行給費を獲得し、その助いで昔からの夢を実現したいと願っていた。〕

第3帝国へ行ってその国家・社会についてレポートを書くと言えば、何か堅い内容を予期させられるのであるが、このレポーターは先ず自分の「昔の夢」といった話題を持ち出して、読者の心をちょっと驚かせ、同時にリラックスさせる。「1939年の春」とはヨーロッパに第一次大戦の起こった年の春である。det の所有格を用いて ved dets Hjælp は ved Hjælp af dette とするよりも文語的な感じを与える。

- (2) \* \* Jeg vilde rejse med Pilgrimmene til Mekka, sammen med Farah Aden, som i tyve Aar havde været min Tjener i Afrika, og med hans gamle Moder hjemme fra Somaliland, som jeg aldrig havde set, men som gennem Farahs bestandige Omtale var blevet en gammel Bekendt.

〔巡礼たちと一緒にメッカへ行くつもりだった。アフリカで20年間私の使用人だったファラーと、そしてソマリランドにいる彼の母親と一緒に——彼女とは1度も会ったことはないのだが、ファラーがいつも話していたので古い知人になっていた。〕

昔から持っていた「夢」が聖地メッカへの巡礼の旅であることがここで判明する。それも1人旅ではなく、彼女のアフリカ滞在中(1914~31)農園の執事をしていた<sup>(5)</sup>ファラーというソマリ人の回教徒とその母と一緒にゆこうというものだった。

「昔の夢」の内容が、この記事を書く3年前に出した『アフリカの農園』(1937)と大いに関係があり、読者に自分はその本の著者だということを印象づけようとしている意図が読みとれる。

関係代名詞 som (Eng. who, whom) による形容詞節が、この文中3つも出てきて、ファラーとその母親について、より詳細に説明を加えてゆく。

- (3) \* Farah og jeg havde i mange Aar set frem til denne Pilgrimsfærd.

〔ファラーと私は何年もこの巡礼の旅を楽しみにしていた。〕

Blixen の他宗教一回教一への関心が、他の回教徒とメッカへ巡礼の旅に出たいと思う程強かったのは彼女の少女時代に過した家庭環境<sup>(6)</sup>にもよるだろうが、何といってもアフリカで多くの立派な回教徒と接した事が原因であろう。そしてキリスト教国から来た作者がアフリカで回教に対する深い関心と敬意を示したことは、反対に彼女が土地の回教徒から大きな尊敬を勝ち得ることになった。at se frem=at glæde sig til noget (Eng. look forward to)

『アフリカの農園』では読みとれなかったが、前述の「巡礼の旅を楽しみにしていた」ということから、既にケニア滞在中から巡礼旅行のことを考えていたことがわかる。

(4)\* \* Naar vi blev rige, sagde vi, skulde vi rejse til Mekka.

〔私たちが金持ちになったら—私たちは言っていた—メッカへ行こうと。〕

「金持ちになったら」という表現が顔を出すのが、回教徒の習慣として、メッカまで巡礼に出られるのは金持ちの証拠であったのだろう。Blixen のアフリカでの生活は金銭的には全く余裕がなかった<sup>(7)</sup>。

引用符をつけずに Naar vi blev rige, と言っていた事の内容の前半で文を始め、sagde vi (Eng. said we) を前後コンマで区切って挿入しているが、これは直接話法の形をとっていないし、また間接の話法でもない第3の方法で dækket direkte tale (Eng. covered direct speech) といわれる技法である。(cf. Aage Hansen: Sprog i Sproget, 130) 直接法に比して云いまわしがややわらかく緩和されているという印象を受けるが、間接法よりはずっと生き生きと会話の内容を伝えている。

(5)\* Men vi blev aldrig rige.

〔しかし、私たちは結局金持ちにならずじまいであった。〕

アフリカ滞在中の農場経営はいつも赤字で、ついにそれを売って帰国した Blixen は、処女作『七つのゴシック物語』(1934, 35) を発行し、初めて金銭的な余裕をみせた<sup>(8)</sup>。その時、彼女はすぐさま、もう1度アフリカへ戻る事を真剣に考え、1936年ロンドンの1新聞社に雇われて、アフリカへの旅を実現しようとしたが、結局行けずに終わった<sup>(9)</sup>。

aldrig (Eng. never) を用いて ikke (Eng. not) を用いるより更に強く打ち消している。

(6)\* \* I Løbet af Sommeren fik jeg at den Arabiske Legation i London Løfte om et Introduktionsbrev til Ibn Saud, og tænkte mig da, at Rejsen var nogenlunde sikret.

〔夏の間にロンドンのアラビヤ公使館からイブン・サウド王への紹介状の約束をもらい、それでこの旅行はなんとか確かなものになったと思っていた。〕

Blixen はアフリカ滞在中からしばしば帰国の折にはロンドンへ立ち寄っていたので、その当時からアラビヤ公使館とは接触があり、知人もできていたと思われる。

tænkte mig da は tænkte の目的内容が後に続いている。すなわち at…以下の名詞節である。da は「その時」と時間的副詞にもとれるが、ここではむしろ合の手のように入れる da であろう。なぜならもし時を強調するなら og da tænkte jeg mig と da を文頭に出すことが考えられるからである。

(7)\* Maaske vilde jeg kunne formaa Ibn Saud til at give mig en Eskorte,

〔多分私はイブン・サウド王が私にエスコートをつけてくれるようにすることもできるだろう……〕

王への紹介状は巡礼の旅を容易にする大切なものであったのだろう。

Maaske は文全体の内容を推量する、文副詞である。formaa は文語的な云いまわしで、口語ならば faa を用いるところであろう。この faa は誰々に何々をさせるという使役の意味をもつ。

(8)\* og Farah og jeg vilde købe arabiske Heste og forbinde Valfarten med et Strejftog i det lykkelige Arabien.

〔そして、ファラーと私はアラビヤ馬を買って、巡礼の旅と南部アラビヤへの気ままな旅を兼ねてみたいと希望していた。〕

護衛をつけ、馬に乗っての巡礼を想像して胸をふくらませる Blixen の姿が目の前に浮かぶと同時に、土地の名前が示すように Lykkelige Arabien 「幸福のアラビヤ」—アラビヤ半島南部—ではその名のように何か良い事が起こると言う気持ちも混じっていると考えられる。

Strejftog はもともと略奪のための急襲といった意味であるが、ここでは気持ちのおもむくままの旅という意味に用いられている。つまり彼女の躍動する心の高まりを満たしてくれるものとして、この言葉をユーモラスに使用したのであろう。

(9)\* Men det trak op til Torden hele Verden over,

〔しかし、世界中を震撼させるような事が起こった。〕

第二次大戦の気ざしが見えてきたことを、det trækker op til Torden という表現を用い、これは udsigt til skænderi [けんかになりそうな様子] とでもいう意味にも用いられる成句である。



Torden は雷で、空の荒模様、あたりを震わせる音を思わせる。そのような出来事として大戦をとらえている。直接的表現ではないが、やはり大戦前の世界情勢を比喩的に表していると思える。

(10) \* \* og jeg forstod at jeg hellerikke denne Gang vilde naa frem til Mekka.

〔それで私は、また今度もメッカには行けないのだということがわかった。〕

heller ikke (Eng. not...either) と現在 2 語に分けるところをこのテキストでは hellerikke と 1 語の綴りにしている。Brixen は帰国後何度もアフリカ行きを企てた。先ず(5)で述べた1936年、また、30年代にはアルバート・シュヴァイツァーに相談してマサイ保護地に子供の病院を建てようとした事など具体的に渡航を考えたにもかかわらず実現せず、再度ここでも……という深い失望の色が伺える。戦争が起こったら、全然外国旅行などとはできない状況になることは、アフリカ滞在中に第一次大戦を経験した彼女にはいやになる程わかっていたのであろう。

(11) \* \* Da Krigen brød ud d. 1ste September blev Bevidstheden om Indespærring mig uudholdelig.

〔戦争が9月1日に発した時、閉じ込められるという思いが私をたえがたい気分にした。〕

ケニア滞在中、Blixen は第一次大戦勃発と共に軍属の夫の命で武器や食糧をタンザニア国境に運んだ<sup>(10)</sup>。それは、白人女性が、キャンプに入れられるという噂が広まったからで、この難をのがれるためと見られる。Indespærring〔とじこめる事〕という感じを強く持ったのは、この経験が影響している。小さなデンマークに閉じ込められてしまうのではないかと考えると、アフリカでの第一次大戦の起こった当時の苦しみが甦って、今度も何とかしなくては…と心があせったのだろう。

mig は「私にとって」であるが、このような間接目的語の用い方も、“利害の与格”と考えられ、この語に特に読者の関心を集めようとしている。“他の人にとってはいざ知らず” 私にとっては……と強めている。時を表す副詞節が文頭にきており、文尾は mig uudholdelig と 2 語で、文頭が重い文となっているが、最後の語のはじめの u は否定を表し、そこには強いアクセントがおかれ、文尾がシラブルの多い語で重く、強調し、文を引きしめることで文全体のバランスを保っている。

(12) \* \* D. 3die September kørte jeg til København, gik op paa „Politiken“s Kontor og bad Redaktør Hasager om at give mig et Arbejde som Journalist, af hvilken Art som helst og hvorsomhelst udenfor Danmark.

〔9月3日私はコペンハーゲン市までドライブし、ポリティッケン新聞社の事務所を訪れ、編集長のハサヤー氏に、どんな仕事でも、デンマークの外ならどこでもよいから、ジャーナリストとしての仕事をくれるよう頼んだ。〕

9月1日に大戦が勃発、3日には「小さなデンマークに閉じ込められては耐えられない」問題を記者となることで解決すべく行動に出た Blixen はまたそれだけの能力の持ち主でもあった<sup>(11)</sup>。1937年には『アフリカの農園』を世に出すことで社会的に才能を認めさせた彼女は、自信をもってポリティッケン新聞社<sup>(12)</sup>を訪れる。思ったことをさっさと行動に移すてきばきした行動を、三つの単文を重ねて、(a)コペンハーゲンへ行き、(b)ポリティッケン新聞社の事務所を訪ね、(c)海外派遣のジャーナリストの仕事を欲しいと頼む、と行動の順に事実を簡潔に記述している。

(13)\* \* En saadan Opgave vilde sikre mig fri Adgang til de L nde, hvis D re ellers var saa strengt lukkede.

〔そのような仕事となれば、その門戸をさもなくばかたく鎖していた国々へ入る自由を私に確保することになるだろう。〕

門戸を鎖した国々へも自由に出入りする特権を得るために記者になろうとするのが Blixen の目のつけどころであった。En saadan Opgave (Eng. such a task, duty) はレポーターとして外国へ行行って、その国の事情を記事にする仕事を指すが、ellers (Eng. otherwise) があることで、一般にはもうすでに当時はそれらの国々への入国ができない状況であったと思われる。

(14)\* \* Jeg sagde til Redakt r Hasager at jeg paa ingen Maade af Naturen var Journalist.

〔私は編集長ハサヤー氏に、自分は生れつきどうみてもジャーナリストではないと言った。〕

ここでは Blixen 自身がジャーナリストとしての適不適について述べている点が興味深い。(彼女は自分を fort llerske——ストリーテラー——と呼ぶのだが<sup>(13)</sup>事実、彼女はヒットラーに面会の機会もあったようだが、自分の著書を彼に献本して申し込まなくてはならない事を知って、面会の約束を取りやめた (cf. *Essays* 121, C. Svendsen: *The life and Destiny*, 154) というエピソードもあり、普通のジャーナリストなら実行するであろう重要人物とのインタビューにも抵抗を感じた。それ故、paa ingen Maade (Eng. in no way), を前の位置に出し、かなり強く打ち消し、自分の性格を分析している。

(15)\* Jeg havde ingen Indsigt i Politik og ingen politisk flair.

〔私は政治への洞察力も政治的な勘も持っていないと言った。〕

何に対しても意見を述べられるが、ここではむしろ、専門的知識に欠けることを謙遜な言いまわしを用いて述べたと思われる。

‘flair’のようにフランス語で、デンマーク語として一般化していない外国語語彙を Blixen は時として用いる<sup>(14)</sup>。

(16)\* Men jeg var et ærligt Menneske,

〔しかし、私は誠実な人間です、(と言った)〕

前文から引き続いて、この文は編集長に言った内容 (14の動詞 ‘sagde’ の目的語) になっている。Blixen は正直な、誠実な人間として自分を先ず紹介している。

(17)\* og maaske kunde ogsaa en fordomsfri Lægmands Optegnelser fra en politisk mægtig bevæget Tid engang i Fremtiden faa en Slags Interesse som document humain.

〔それに、多分政治的に激しく動揺する時期の、偏見のない素人のレポートもまた将来いつかヒューマン・ドキュメントとしてある種の関心をひくこともできるのではないか、(といった)〕

この文には、短編を書いている時と同じように、自分の仕事が未来への遺産となり、時代を越えて読者を持ちたいという気持ちが隠されていると思われ<sup>(15)</sup>、また、自分なら偏見なく、公平な素人の目で記録を綴ることができるとの自信ものぞかせている。

fordomsfri lægmand (Eng. unprejudiced layman) と自分を見、maaske (Eng. probably) を文頭においてその自分の書く事も人々の関心をひくかも知れないと、控えめな表現を用いている。politisk mægtig bevæget tid (Eng. politically immensely eventful time) とは勿論大戦の勃発した当時を指す。document humain も一般のデンマーク語にはなっていないフランス語である。

(18)\* \* Nogen Tid senere skrev Redaktør Hasager til mig, at Politiken, sammen med et norsk og et svensk Blad, vilde engagere mig til at rejse en Maaned til London, en Maaned til Paris og en Maaned til Berlin, og til at skrive fire Kroniker fra hver By.

〔しばらくして、編集長は私に、ポリティッケン社とノルウェーとスウェーデンのある新聞社が、ロンドンへ1ヶ月、パリへ1ヶ月、ベルリンへ1ヶ月行き、各都市から4つずつ記事を書くために私を雇用すると返事を書いてよこした。〕

ポリティックエン社及び北欧にある他の2社が Blixen を雇い、特別記事を取材させ、レポートさせる事になるが、実際にはベルリン以外の都市には行けなかった。(4月10日にロンドン行きを予定していたが前日、デンマークはドイツ軍に占領されたからである。)

フランス語の発音を残す *engagere* (Eng. *employ temporarily*) という語の意味は4つの都市からの *Kronikker* (Eng. *feature articles*) “特別記事” が終わってしまえば仕事から解かれる、という意である。ベルリンからの記事は、Ⅰ、*EN GAMMEL HELT I BREMEN* [ブレーメンの老英雄] Ⅱ、*STORE FORETAGENDER I BERLIN* [ベルリンにおける大企業] Ⅲ、*KRAFT OG GLÆDE* [力と喜び] Ⅳ、*SKUEPLADSER* [劇場] の4つの記事となった。

(19)\* \* Det var mere end jeg havde kunnet haabe.

[これは私が希望しえる以上の事であった。]

助動詞の不定形 *at kunne* は *kan, kunde, kunnet* と活用する。ちなみに過去分詞 *kunnet* は英語には見られないものである。*mere end* (Eng. *more than*)、こんな良い仕事であろうとは彼女も考えられなかったのだろう。驚きと共に喜んでいる様子が直接にはないが充分読みとれる文である。

(20)\* Jeg havde Venner og Bekendte i Regeringen i London,

[私は友人や知人をロンドンの政府にもっていた。]

家族(母方の祖母)に英国人の血が流れていること、英領ケニアで多くの英国人に会った事などから、知人、友人が多く英国にいたし、また彼らが *Regeringen* (Eng. *Government*), 官職についていたことであろう。*jeg* (Eng. *I*) で文を始める事に躊躇しない態度はテキストⅠの場合と異なる。(cf. テキストⅠ, *IDUN* Ⅳ)

(21)\* \* derovre vilde Opgaven, mente jeg, blive plain sailing.

[そこなら仕事は私の思うように順調にいくだろう (と私は考えた。)]

前の文のロンドンを受けてすぐ *derovre* (Eng. *over there*) で文を始めている。

*mente jeg* (Eng. *meant I*) も、軽い意味で挿入的になっているが、他の部分は文法的には *mente* の目的語である (cf. (4) *sagde vi*)。‘plain sailing’ も英語のままでデンマーク語にはなっていない成句をはめ込んでいる。行けば後はどうにでも仕事はやれる、容易にやっつけられるといった、高をくくった態度であったことがこの表現にみられる。

(22)\* Jeg havde gode Betingelser for at kunne løse den ogsaa i Paris.

〔私はパリでもこの仕事をさばくことのできる良い条件を持っていた。〕

パリでもロンドンと同じように、知人関係が多いので、仕事の方もうまくいくと思っていた。  
gode Betingelser (Eng. good conditions) という表現でそれを示し、den は前文の opgaven を受けている。

Blixen はフランス語もでき、少女時代にはパリで画を習い、何度も訪ねていったヨーロッパの好きな都市であったので、今回は仕事のために行くのではあってもこの都市に関しては気分的に余裕があったと思われる。

(23)\* Men jeg kan ikke tale tysk,

〔だが私はドイツ語は話せない。〕

Blixen 自身、ドイツ語が話せないと言うが、全作品中適切なドイツ語の挿入があり、それからみてドイツ語に対する Blixen のセンスも敏感である事がわかる。

(24)\* og jeg havde ingen Forbindelser i Det Tredie Rige.

〔それに私は第3帝国には知人関係が1人もなかった。〕

Forbindelser (Eng. connections) いわゆる知人関係、「コネ」といったものが第3帝国の要人の中になかった。注目すべき点はドイツに「友人」があったことと厳密に区別していることである<sup>(16)</sup>。

(25)\* Efter nogen Betænkning bestemte jeg mig derfor til først at tage til Berlin.

〔慎重に考えた末、それだから先ずベルリンへ行くことに決めた。〕

困難な場所から仕事を片づけてゆこうと考えるに至る経過を、efter Nogen Betænkning (Eng. <sub>1</sub>) after careful deliberation, <sub>2</sub>) after some hesitation)

と短く表現している。derfor (Eng. therefore) は(23)(24)の両方の文を受け、以上2つの理由からという意味である。først 「先ず」の位置も文尾に置かず at の前に置いている点などは、強調の意もあるが文語的な感じも与えることになる。

(26)\* \* For at faa mit Pas og mine Papirer i Orden havde jeg nogle Samtaler med Minister Renthé-Finck, og fortalte ham da ogsaa at jeg fra Berlin skulde videre til London og

Paris.

〔パスポートや書類を整えるため、私は何度かレンター・フィンク公使と話し合った。そしてその折彼に私はベルリンからさらにロンドンとパリへ行くのだと話した。〕

Renthe-Fink, Cecil von (1885—1964) は1936年以来コペンハーゲンに駐在していたドイツ外交官で、1940年4月9日にドイツ軍がデンマークに進入してからはドイツ帝国を代表する人物であった<sup>(17)</sup>。たまたま Blixen と同年輩である。

For~Orden 10語よりなる副詞句はこのテキスト中最も長い文頭で、文尾が5語と短くなっているが、次に来る文 *fortalte~Paris* と並列しているため、全体としては文頭が重いという感じは与えない。*da* も *ogsaa* (Eng. then, also) もアクセントの弱い副詞で、*da* は時を表すが語調を調える合の手のような役目をも果たす。*skulde videre* (Eng. should farther on) はしばしば本動詞がなくても意味は明瞭であり、*tage* (Eng. go) あるいは *rejse* (Eng. travel) などの本動詞が省略されていると考えられる。

②7\* Jeg kom endelig afsted d. 1ste Marts 1940, og blev i Berlin til d. 2den April.

〔私はやっと1940年3月1日出発し、ベルリンに4月2日まで滞在した。〕

*endelig* (Eng. at last) の副詞があることで、外国へ出る手続きが何かとややこしく手間だったことが伺える。初めてポリティッケン新聞社を訪ねてから約半年が経過している。ベルリンに1ヶ月滞在するという取り決めだけは実行されたこともこの文ではっきりする。日時、滞在期間といったことなどを明細に記すことも、後につづく記事内容と関係があるからだと思われる。

②8\* \* Der blev i Berlin vist mig en Interesse, som i højeste Grad overraskede mig selv, og som skyldtes, at man der vidste Besked med de videre Planer for min Rejse.

〔ベルリンでは私に対して大きな関心が示され、それが私自身を非常に驚かした、また、そこでは私のそれ以後の旅行計画について知っていたことによるのであった。〕

文頭におかれた副詞 *der* はアクセントの弱い語で、この語を文頭にした文では一般的に *interesse* (Eng. interest) が示されたことが非人称を用いて表現されている<sup>(18)</sup>。もし *en interesse* が文頭に来た場合は強調の意を含む (cf. Karlsson, 84)。初めの *som* (Eng. which) は、*en interesse* を受け、次の *som* も同じく *interesse* を受ける。

*skyldtes* は *skyldte* (Eng. owe) の過去形に受身の *s* が加わったようにみえるが (Eng. was caused to) -*s* の形のみ存するので、過去形は *skyldtes* で、受身ではなく、中間態である。

(29)\* \* Da jeg fra Flyvepladsen kom ind paa Hotel Adlon, ventede allerede to Doktorer fra Propagandaministeriet paa mig.

〔飛行場からホテル・アドロンへ来ると、すでに宣伝省からおえら方が2人私を待っていた。〕

自由の国デンマークから来た Blixen にとっては、案内役であれ監視役であれ、依頼しないのに人がつきまとうという、この第3帝国の外国人に対する歓迎ぶりは有難迷惑であっただろうと思える。文頭の副詞節は9語と長いのに比して、文尾要素は paa mig と2語で短く、この文尾の長さによって、彼女が予期せざる事が起こった時の驚きとも、不快とも言える感情を含ませている。それを Doktorer〔博士たち〕と皮肉とも考えられる語を用いて表し、また allerede〔すでに〕を動詞のすぐ後において強調した感じを与えている。

以上テキストⅣの各文について分析を試みたが、その結果をまとめてみる。(参考のため文頭グラフ7つを最後に添付した。)

1.1. 文頭を示すグラフを、前回までのテキストと同じ方法で制作してみたが、先ずその長さにおいて特徴が見られた。1語よりなる文頭が1番多く(17文)、次に3語よりなるもの(7文)、4語(2文)、7語、9語、10語(各1文)と続き、最長のものが10語であるということは、今までのテキストⅠ～Ⅳの最長を比べるとこのⅣは最も短いということである。

次に1語よりなる文と10語及びそれ以上の語数よりなる文頭を取りあげ、Ⅰ～Ⅴを図表化してみた。

	テキスト	1語文頭	%	10語及びそれ以上文頭	%	最長語数
Ⅰ	『アフリカの農園』出だし	10/30	33.3	2/30	6.7	14
Ⅱ	“翼”より	13/24	54.2	3/24	12.5	25
Ⅲ	手紙より	15/28	53.5	8/28	28.5	23
Ⅳ	新聞記事より	17/29	58.6	1/29	3	10
Ⅴ	「悲しみの土地」最後	9/24	37.5	2/24	8	20

上の表でわかるように、短い文頭を持つ文が1番高いパーセンテージ58.6を示すのが、新聞記事であるこのテキストであり、しかも非常に長い文頭を持つ文が他のテキストのようにないことも、注目すべき事実である。言い換えれば、このテキストⅣは凝った文学に現れる散文であるとは言えず、むしろ文学者がわかりやすく書いた、報道を目的とする散文である。

1.2. 文頭の構成要素はここでも(cf. テキストⅠ)主語と副詞の2種類で、その比は(16文

対13文、55.2%対44.8%)である。

文頭構成要素

テキスト	主 語	%	副 詞	%	そ の 他	%
I	21/30	69	9/30	31	—	0
II	18/24	75	5/24	20.8	(目的語) 1/24	4.2
III	21/28	75	6/28	21.4	(動 詞) 1/28	3.6
IV	16/29	55.2	13/29	44.8	—	
V	13/24	54	10/24	42	(目的語) 1/24	4
H. Kirk <sup>(19)</sup>	21/39	53.9	16/39	41	(補 語) 2/39	5.1

主語で文を始めるのが普通であるとすれば、この新聞記事は上の表でみるように最もその「法則」に反したものである。すなわち副詞の文頭が44.8パーセントになっているからである。

そのうえ、このテキストⅣの添付グラフ（表 K. B. Ⅳ）でみるように、長い方から5つの文をとってみてもそのすべてが副詞文頭をもっており、これはグラフ（表 Børn）と対比してみると、その相異が明かになる。すなわち、子供の書いた文にはあまりに長い文頭がみられない点はこのテキストⅣと似ているが彼らの文中長いものが主語であるという点である。これは、長い副詞を文頭に置くことは、意識的であるか無意識的であるかは断定しにくい、作家が何らかの目的を意図し文章を練っている時に現れるのではないと思われる。また、このテキストではそれら副詞要素が段落の始めに用いられ、前の段落からの続き具合をなめらかにしている。

1.3. 文頭に副詞をおいた、いわゆる倒置語順は前述のように19文中13文あり、その中で時を表すものが最も多い。内容からみても、著者が特派記者としてベルリンを訪れることになるまでの経過を、順を追って説明記述していくのであるから、いつ、何が起こったかを示すことが必要となる。(1)1939年の春 (6)夏の中に、(11)戦争が起こった時、(12)9月3日に、(17)しばらくしてから、(29)飛行場からホテルについた時、と6文もある。これらは倒置の半数弱を占めるものであるが、デンマーク語の習慣から、しばしば文頭に時を表す副詞要素が出されるから、特別に強調すべき理由で倒置がなされたとは思えない。しかし、先に述べたように、テキストの内容からして、1つ1つ、日時を追って文頭に出す方が読者には事の経過が読みとり易いという点が考えられる。

これら時を含めて、記述的なものが多い文頭の中で、maaske ((7)、(16))は文全体の内容に推量的な意味をもたせる種類のものである。(21) derovre は場所を示し、前文(20)の i London を受けるが、前文からのつながりをよくするためとみられる。(28)の Der は場所ではなく、デンマーク文では文頭の主語の位置にアクセントの弱い der がくる事があることは非常に多い。(cf.



Karlsson, 84)

1.4. このテキストの文頭グラフを他の作家のそれと比較してみると、このテキストは19世紀のスタイリスト (cf. グラフ M.A.G.) たちからは遠ざかり、今まで Blixen の作品にはみられなかった傾向が現れる。それはこの表Ⅳからみるだけでは、彼女と同時代に活躍したリアリズム作家ハンス・キルク (Hans Kirk・1898—1962)<sup>(19)</sup>のグラフに現れた文頭のパターンに類似して来ていると言える。(cf. 添付表 H.K.)

作 家	作 品	(文頭) 1 語	5 語以下	6 語以上	最長文語	平均語数 1 文につき
Karen Blixen	Breve fra et Land (記事)	58.6%	89.6%	10.4%	10語	17 <sup>+</sup>
S. E. Rasmussen	Du og De (記事)	57.6%	92.3%	7.7%	9 語	12 <sup>+</sup>
H. Kirk	Fiskerne (小説)	53.8%	97.4%	2.6%	6 語	11 <sup>-</sup>

今日 3 人のすぐれたエッセイストと称せられる人に、ヤコブ・パルダン (Jacob Paludan 1896—)、ペア・ランゲ (Per Lange 1903—)、スティーン・ラスムッセン (Steen Eiler Rasmussen 1898—) がある。ここに、最近のラスムッセンの 1 新聞記事を図表化してみたところ、(Berlingske Aften 1978 年 4 月 28 日 “*De og Du*”) 非常に共通点があることが認められた。(cf. 添付表 S.E.R.) 1 人の作家にも種々の文体があることは周知の事実であるが、Blixen の場合もこのテキストⅣで見ると彼女の短編や個人宛の手紙とは内容を異にし、また読者の層や掲載される場所によって、新聞記事に適した文体をつくりあげている。夢、アラビヤ公使館への働きかけ、失敗に終わった計画、それに対する急速な反応、遂にベルリン行きに成功するなど、その内容は次々と動いてゆく。1 人称 jeg の形で、虚構の世界を描くのではなく、現実の世界に立って、作者の想像と思考のおもむくままに綴っていく。特に強い感情を表すための文頭要素 (主語・副詞以外のもの) を用いず、また文体を練るための非常に長い主語や副詞文頭は見られないが、二、三の感情の節が、やや長い副詞文頭を持つ文中に認められる程度である (11)、(26)、(29)。

2.1. 文のバランスという点から考えてみると、文頭が極めて重く文尾が短いものは、二、三の例外を除いてはみられない。目立つ文は戦争が始まった時の作者の気持ちを表した個所 (文頭 7 語—文尾 2 語) と (cf. 11)、ホテルへ着いたら役人 2 人が待っていた個所 (文頭 9 語—文尾 2 語) (cf. 29) で、ここには他の文より強い心理的な動き (耐えがたい気持ち、驚き) がみられる。

2.2. 作者が願っていた仕事を得られ、その喜びを現わしてから (cf. 19) ベルリンへ行くこと

に決める (cf. ②5) までは、1 文の平均が 9 語強と短く、テンポが速くなっている。これは喜びではしゃぐ作者の気持ちと、次々と計画を練る、急ぎ高まる作者の気持ちと一致する。

3. 主文中の動詞を一瞥した時、平易なものばかりだという印象を受けた。そこで外国人向のデンマーク語初歩会話書 *Laer at tale dansk* (1964)<sup>(20)</sup> の Ordliste にあたってみたところ、テキスト中の動詞はすべてそのリスト中に選ばれた語彙であった。これは新聞が幅広い読者を持つ、という点からみて、最も望ましい語彙を選択したと言える。

また、動詞の種類からみると、他動詞 (15) 自動詞 (11)、助動詞 (9) であるが、他動詞中にも状態を示すものが多い。この点は、前回までにみたテキストの状態記述を主とした動詞と同じ種類のものであるといえる。(cf. テキスト I ~ III 考察 3)

4. 節を含む文が全体の半数以下である (13 文、44.8%) ことは、テキスト全体が複雑な構造ではないということである。複文の中でも、at で始まる名詞節の多くは口語においても用いられる類である。(cf. (7) …tænkte mig da, at… (10) …jeg Forstod at… (14) …sagde til R.H. at… (18) …skrev R.H. til mig at…) 次に時を表す副詞節 ((11), (29)) や、比較、理由を表す副詞節 ((19), (26)) なども決して書き言葉とは言えない程、口語と共通した表現である。しかし、節の中にも口語から遠い表現も見られる。例えば挿入された、いわゆる“引用する文” (4) …sagde vi, … (21) …, mente jeg… などは、口語ならば普通、文の始めか最後に、vi sagde at… とか…, sagde vi. とか入れるところであろう。最近そのような場合、引用される方の文は引用符“ ”を用いなくて地の文として書かれる場合が多くなり、Blixen も例外ではない<sup>(21)</sup>。更に、この引用する文を挿入する位置が、Blixen の場合しばしば特徴的であることが指摘されている (cf. Albeck, 59)<sup>(22)</sup>。(28) は節の中にまた節を含むただ 1 つの文である。それにもかかわらず、全体的にみて、すぐに読んで意味がとれない程こみ入ったものは 1 つも見られない。平易で読みやすい文からなっているといえる。

5. 使用されている形容詞用法の語は大部分が品詞的にもともと形容詞である語で、名詞の所有格や動詞の過去分詞 ((17) lægmands, (13) lukkede (17) bevæget) なども混じっているが、ごくまれである。「最も必要とされる語<sup>(23)</sup>」が過半数 (54.2 パーセント) を占めるが、動詞の場合可能であったように、すべての形容詞をこのグループから選ぶことはできず、残り (45.8%) は、bestandige, arabisk, lykkelig, uudholdelig, lukkede, politisk, ærligt, fordomsfri, mægtig, bevæget など、リスト (ordliste, cf. *Laer at tale dansk*) に記載されていない語であった。

このことからここに使用された語彙の巾の広さがわかる。しかし、リストに記載されていない語も、1 語 1 語について、どれほどの頻度で用いられている語かがわかれば、Blixen が如何なる読者を対象にしているか、あるいはできるかがわかる。

その他、修飾的、また述語的に形容詞を重ねることによって、文を「練る」といった操作は認められない (cf. テキスト I) この点は短編の場合と異なる。

このテキストで特に注目される点は、いまだ外国語という感じを与える形容詞 (+ 名詞) を混入していることである。(後述・9)

6. 文の接続についても、等位接続詞 *men, og* が使用されており、従位接続詞は見当たらない。この点は、他のテキストと同じである。短編や手紙などに比して、簡潔さ、歯切れの良さを予期できる新聞記事であるが、前述した、文頭の副詞が文の接続を滑らかにする役を果たしている。

7. 感覚的な表現とみられる、色彩、嗅、音、触覚に関する記述は見当たらない。ただ(9)の分析で述べたように、「雷になる」*det trak op til Torden* という成句で「けんかになりそうな様子」と転意しているため、音の感覚表現、といってしまうかどうかは疑問である。

8. Blixen が短編や手紙の中で頻々と駆使した比喻に関しては、このテキストに関する限り、一、二の文を除いてあまり記述することがない。ただ考えられることは、(8)で述べたように '*og forbinde Valfarten med et Strejftog i det lykkelige Arabien.*' の文中で、'*Strejftog*' [急襲] や *lykkelige* [幸福の] といった語から受ける感じは、彼女が夢を実現して、アラビヤの各地を心おもむくままに訪ねて楽しみたい気持ちを表す比喩的表現と考えてもよいのではないだろうか。ただ(9)項で指摘した「雷」に関する表現は、第二次世界大戦のきざしが現れた世界情勢を比喩的に表している箇所である。

新聞記事に比喩的表現を使用することが不適當であるとは言えないのは勿論であるが、出来るだけ「客観的」な記述を要求されるレポートの序では、極めて手っとり早く、それを自分が書くに至った過程を読者に知らせる必要から、1つの事柄を比喩のように他のことがらや関係を借りて表現するよりも、直接に、間違いなくそのことが理解されるような表現を用いることになったと思われる。比喩的表現においてこそ、作家のもつ心の世界、イメージの世界の深さや面白さ、複雑さを読者はくみとる事ができるのであるが、新聞記事などではこの作家の本領は充分に出し得ないようである。

9. デンマークで生れ、主にその国で教育を受け、後ケニアで17年間生活したとはいえ、Blixen が主要な文学作品を先ず英語で書いたことは驚きである。そのうえ、彼女は英語以外の外国語をも作品の中に適当に散在させることができる。それらの中にはラテン語やギリシャ語をはじめ、独語、仏語、イタリー語、スワヒリ語などがある。Blixen と外国語について、筆者は「詩人の使命」—— *Heretica* との関係において” (大阪外大学報41号、1978, pp. 101~102) で

少し述べたが、今ここにみるテキストでも明らかにすっかりデンマーク語になっていない二、三の外国語が顔を出していることに気づいた。

(15)の *flair*、(17)の *document humain* は仏語から来ており、(21)の *plain sailing* は勿論英語の成句である。(前2つは *Nudansk ordbog* には含まれている。) 作家の好みもあって、外国語を用いない他の作家の作品群の中で、彼女が外国語を用いている事実は文体上の1つの特色となっている。

当時のデンマークの文学の主流はあくまでもリアリズム文学であり、そのテーマとしては、主として現実のデンマーク人とその社会の問題が取りあげられていた。このような状況の中で、‘異端者’<sup>(24)</sup> としてデビューした Blixen は、デンマーク文学にエキゾチシズムをもたらしたと言える。このエキゾチシズムの表面に表された小さな現象として、外国語を的確に、また適所に使用したことが指摘できるのである。

意識的にこのエキゾチシズムを作品中にふりかざそうとしたのではなく、Blixen としては的確に母国語で表現できない心的状況や物事を、よりふさわしく言える外国語を知っていたので、どうしても、使わざるを得なかったのではないだろうか。

Blixen が(17) *document Humain* という場合、単にデンマーク語が読まれる狭い範囲でのヒューマン・ドキュメントというより、より広い世界の人々からも、そのように見られる遺産、「全人類に知ってもらいたい記録」をつくるといった抱負がひそんでいるのではないかと思う。(21)の *plain sailing* もデンマーク語に訳せないわけでは決していないが<sup>(25)</sup>、この2語だけが英語であるため読者の目をひき、鮮明になることで、「仕事は簡単にとんとん拍子に運ぶだろう」と思っていた自分の考えを強調させることになる。

(注)

- (1) Yemen=Arabia Felix をデンマーク語で *det lykkelige Arabien* (幸福なアラビヤ)と呼んでいるが、紀元前に都市文化が盛えた南部アラビヤを指す。
- (2) テキストⅠ～Ⅲは本校「中北欧共同研究」(1980年)中に発表している。
- (3) ‘Heretica’〔異端者〕の意、1948～53年発行の文学雑誌、BLIXEN は48年4、5号にこのテキストⅣを、53年の最終号に短編「夜のコペンハーゲンでの対話」(*Samtale om Natten i København*)を掲載、詳しくは大阪外大、学報41号1978、pp.91～109。
- (4) その他の6つは、*En Baaltale med 14 Aars Forsinkelse, Fra Lægmand til Lægmand, Gensyn med England, Om Retskrivning, H.C. Branner: "Rytteren"*
- (5) 実際には1914～31年の17年間であった。
- (6) 彼女の母方はデンマークでは少数のユニテリアン派に属しており、Blixen はこれにあまり好意的でなかった。
- (7) 彼女から家族の者へ宛てた手紙には資金のないことを繰返し述べている。
- (8) 30年代印税が入るとマサイ保護地に子どもの病院を建てたいと思い、アルバート・シュヴァイツァーの忠告をうけたが、その額は充分でなかったという。(cf. *The Life and Destiny of Isak Dinesen*, 177)
- (9) (cf. 同上 P.142)
- (10) この事実は『アフリカの農園』第Ⅳ章「戦時中のサファリ」P.206に書いている。
- (11) 1936年ロンドンで国際連盟派遣委員の資格を得たことから察して。
- (12) 新聞社 *Politiken* (1844年創立、現在約14万部の朝刊を出す。)デンマークで3番目にできた、急進派の機関紙

- (13) cf. レコード 'Karen Blixen Fortæller に吹きこまれたスピーチ中、Indledning 'Jeg er en storyteller, en fortællerske'
- (14) cf. *Synonym ordbog*, Politikens Forlag, 1973 には掲載されている「flair se instinkt」p. 84
- (15) cf. (「夜のコペンハーゲンでの対話」, 184) (大外大41号, 96) 時代を越えて芸術作品の中に生きたいという彼女の望み
- (16) cf. *Essays*, 'En gammel helt i Bremen'
- (17) cf. *Danmarks Historie 14*, 33
- (18) der 非人称構文を適用する範囲は英語の非人称構文よりずっと多くこの場合、不定主語 en Interesse を文頭に持つてくる事はできない。文頭に不定の主語が来る場合、意味は既知形「……というもの」といった意味をもつので、それでない時は der 構文が用いられる。
- (19) Hans Kirk (1898—1962) 代表作 *Fiskerne* (1928) [漁民たち] の著者
- (20) Noesgaard: *De nødvendige danske ord* 中にあるものに〔○印〕をつけてリストにあげている (pp.202~241)
- (21) cf. Albeck: *Dansk stilistik* (p.55)
- (22) Albeck (p.59)
- (23) cf. *Lær at tale dansk*, Noesgaard, ordliste.
- (24) 当時の文学主潮とはあまりに異なっていた。
- (25) cf. B. Kjærulff Nielsen: *Engelsk-dansk ordbog*, Gyldendal, 1964.

表1. K. B.

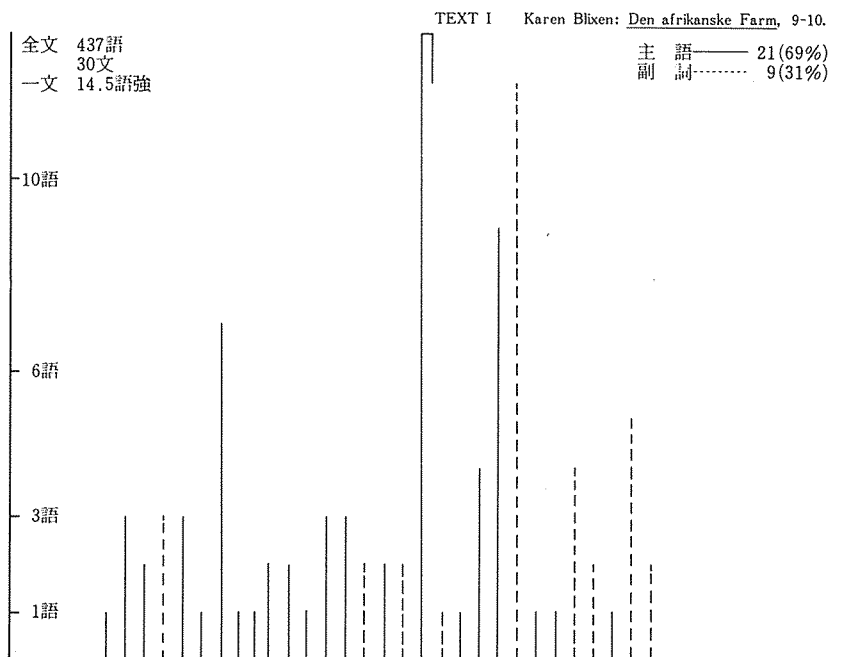


表2

Karen Blixen Text II "VINGER"

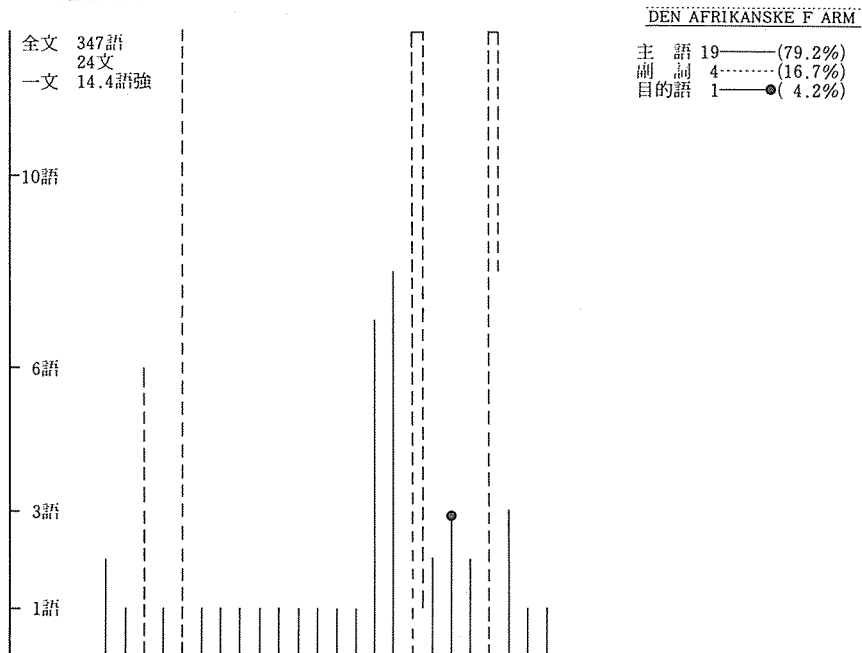


表 3

Karen Blixen Text III

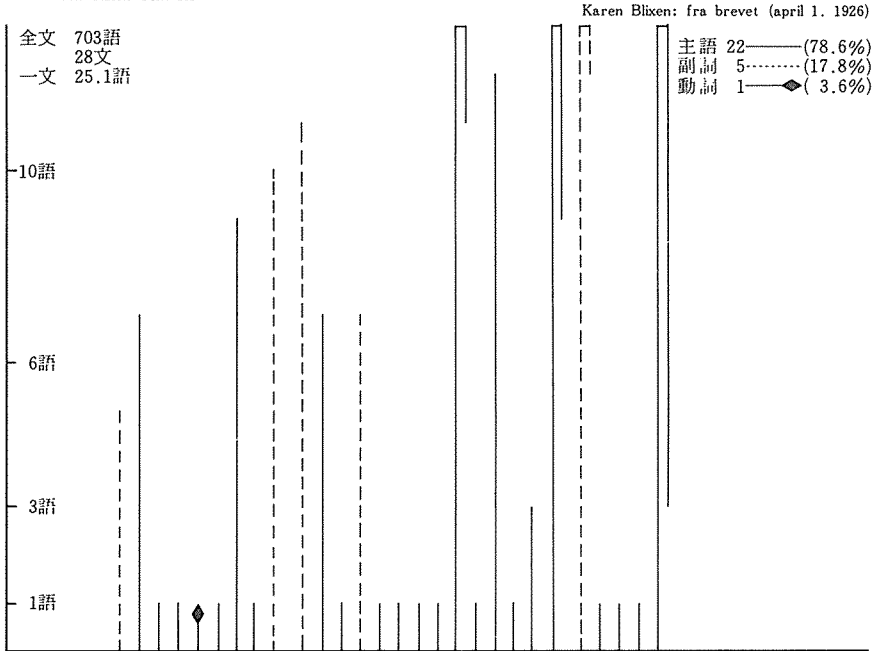


表 4 表4.

Karen Blixen: Text IV Breve fra et Land i Krig

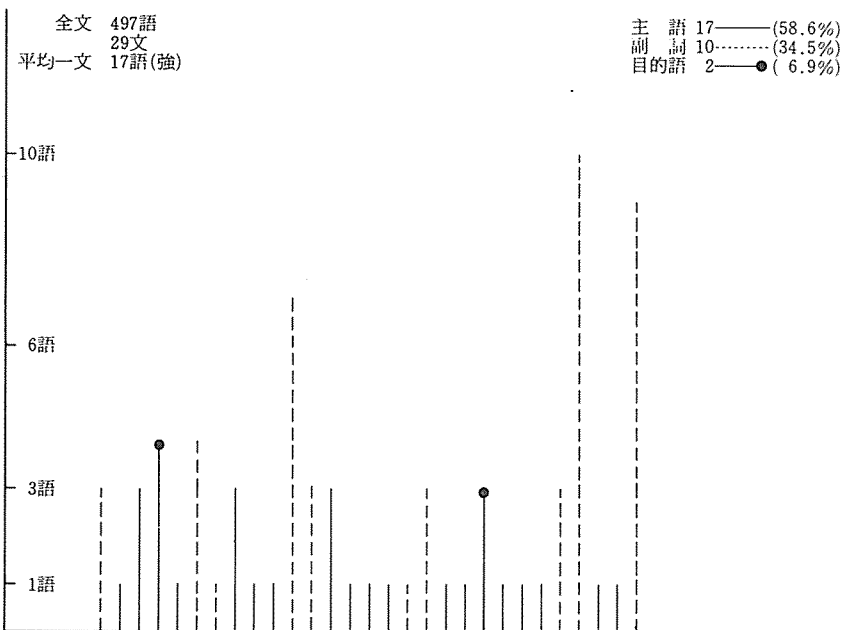


表 M. A. G.

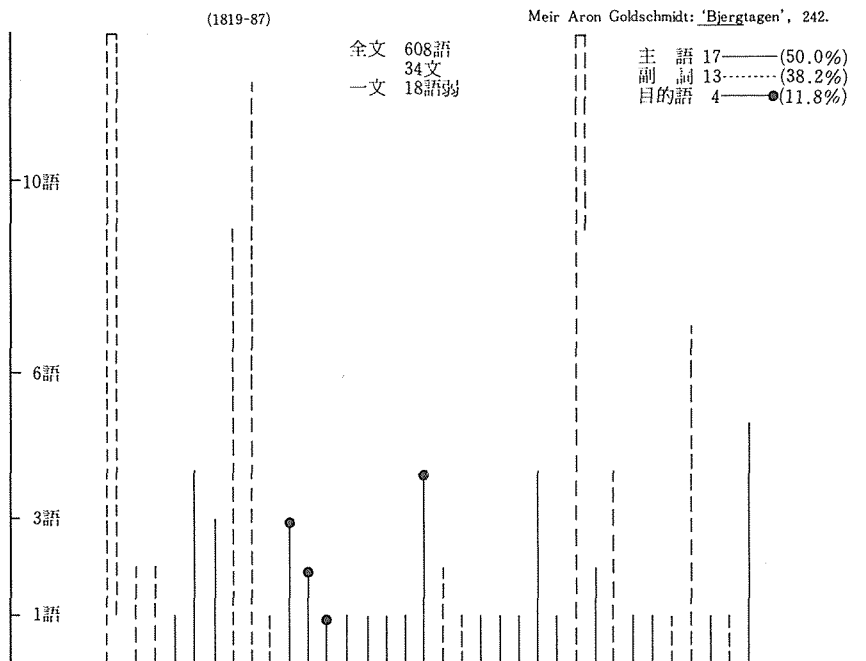


表 H. K.

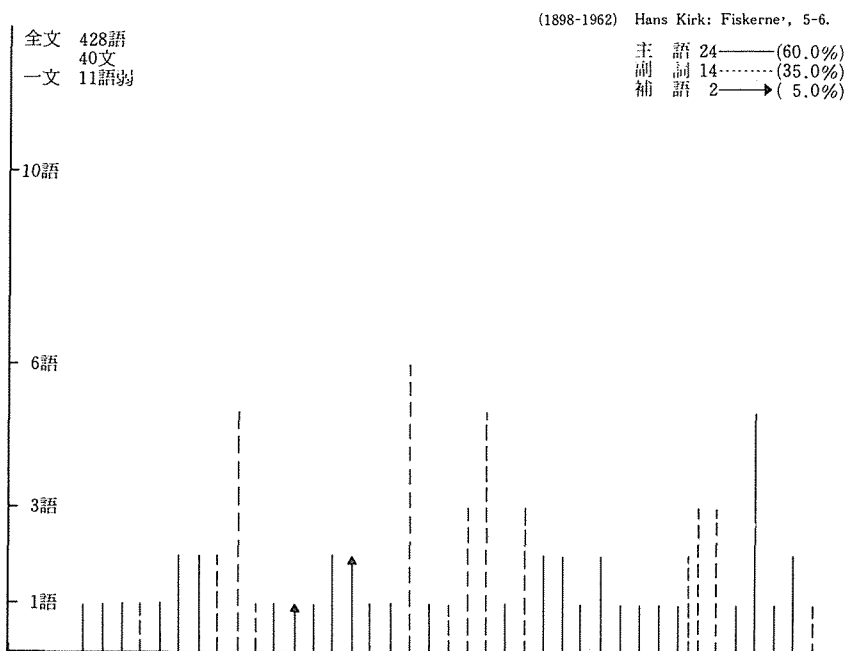




表 S. E. R.

Steen Eiler Rasmussen, "De eller du" (Berlingske Weekendavis, (april 21/28., 1978)

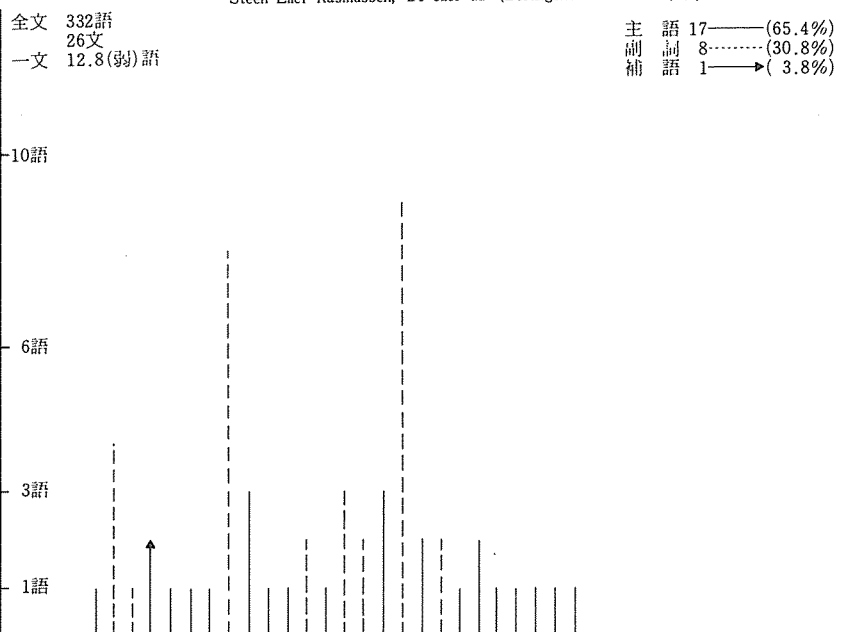
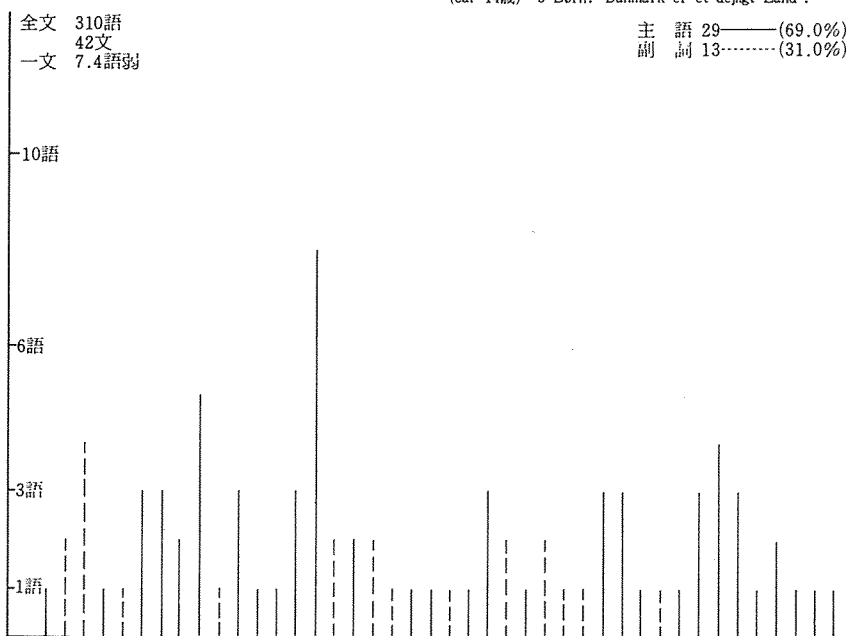


表 BØRN

(ca. 14歳) 5 Børn: 'Danmark er et dejligt Land'.



# 作 者 年 譜

西 歴 (年齢)	
1885年 〔明治18年〕	Karen Christence Dinesen (Karen Blixen) Rungstedlund にて大尉で作家の父 Wilhelm Dinesen (ペンネーム Boganis) と母 Ingeborg の次女として誕生。姉 Inger 妹 Ellen 弟 Thomas, Anders 父 <i>Jagtbreve</i> (G. Brandes に作家として認められる) 出版
1889年 (4)	祖母 (母方の)、叔母 (同) 母、家庭教師による初等教育を受ける。
1892年 (7)	父 <i>Nye Jagtbreve</i> 出版
1895年 (10)	父死す
1896年 (11)	自作 “おごれるもの久しからず” (劇) を家庭内で上演
1898年 (13)	8 月～12月堅信礼への準備 (Søllerød の Vedel 牧師の下で)
1899年 (14)	1 月～8 月スイス滞在。Ecole Benet で絵の勉強はじめる。 コペンハーゲンの尼からフランス語を習う。
1900年 (15)	叔母の Bess から詩を習う。“真夏の夜の夢” “お気に召すまゝ” “二都物語” などのイラスト描く。フランス革命史などに興味を示す。
1901年 (16)	料理学校へ通う
1902年 (17)	Frk. Sodes Tegneskole で絵の勉強に励む。
1903年 (18)	叔母とユニテリアン会議のためオランダに滞在 (9 月) レンブラン等の絵をみる。 前年から王立美術学校に女子も入学を許可されていたのでこの年 (12 月) 入学
1905年 (20)	未完短編サガ Grjotgard Ålvesøen og Aud はこの年あたりに清書された。 詩 ‘Vinger’ 〔翼〕、‘Vuggesang’ 〔子守唄〕なども書かれていた。
1907年 (22)	短編 Pløjeren 〔農夫〕が Gads Danske Magazin に掲載さる。又、‘Eneboerne’ 〔世捨て人〕が Tilskueren に掲載さる。ペンネームはいずれも Osceola。
1909年 (24)	短編 ‘Familien de Cats’ 〔カッツ家〕が Tilskueren に掲載。
1901年 (25)	パリの Academie de Simon et Menard で画を習う。3 月25日～6 月1 日パリ滞在。この後画は Bertha Dorph に師事する。
1912年 (27)	ローマ滞在、パリ・ロンドンにも旅行、12月23日従弟 Bror Blixen-Finecke と婚約
1913年 (28)	12月2 日母と妹と共にナポリへ、14日後1 人でアフリカへ向けて出発。
1914年 (29)	モンパッサで結婚式をあげ、すぐナイロビに向う。 (当時汽車で18時間の旅であった。)
1915年 (30)	病気治療のため一時帰国。詩 ‘Ex Africa’ など書く。
1916年 (31)	夫と11月にアフリカへ戻る。
1919年 (34)	Denys G.Finch-Hatton (1887～1931) に出会う。

- 12月に再度、夫と帰国。
- 1920年 (35) 12月6日弟トーマスと共にまたアフリカへの旅につく、ロンドンよりマルセイユ経由、30日モンパッサ着。弟は以後数年に亘って Karen Coffee Co. を助ける。
- 1923年 (38) 弟、12月中ばデンマークへ帰国。
- 1924年 (39) 母（当時67歳）とトーマスと共にケニアにカーレンを訪問、11月3日モンパッサ着。
- 1925年 (40) 約9ヶ月、デンマークでの休暇の後、アントワープから12月25日ケニアへ帰る。‘Ex Africa’ が Tilskueren に掲載さる。正式に離婚成立。
- 1926年 (41) Georg Brandes に手紙、原稿送る。5月 Sanhedens Hævn [真実の報復] Tilskueren 誌に発表さる。
- 1927年 (42) 母、再度一人でケニアへ。
- 1929年 (44) Denys Finch-Hatton 家に紹介さる。  
母危篤のため一時帰国す。（5月）
- 1931年 (46) Denys 5月14日、飛行機事故のため死す。（5月）  
農園を売却、ケニアを去る（5月31日）“モントラ”号でマルセイユへ、弟トーマスに出迎える。
- 1934年 (49) 処女作『七つのゴシック物語』出版（英語版）。その収入を基金にケニアのマサイ保護区に子供の病院を建てようとし、アルバート・シュヴァイツァに相談にのってもらふ。
- 1935年 (50) アビシニア戦争起り、ロンドン政府にアフリカ行の許可を取ろうとしたが果さず、後、国際連盟の派遣委員の資格を得、ジュネーブへ急ぐ。  
しかしアフリカ行き実現せずロンドン経由、デンマークへ帰る。  
処女作のデンマーク語版出版。
- 1936年 (51) 「真実の復しゅう」王立劇場にて夜間上演される
- 1937年 (52) 『アフリカの農園』（英・デ語版）出版
- 1939年 (54) 母死す。
- 1940年 (55) 新聞社“ポリティケン”の特派員としてベルリン滞在（3月1日～4月2日）
- 1942年 (57) 『冬の物語』出版
- 1944年 (59) 以後13年間にわたって4回の手術と2回の治療をうける。  
国立病院、セント・ルカ病院、ヒラロード病院、陸軍病院、市民病院を転々とする。  
Pierre Andrézel ペンネームで『報復の道』9月1日出版デンマーク語版は秘書による翻訳。後、スウェーデン語版（45年）英語版（46年）アメリカ版（47年）とつづく。
- 1948年 (63) Heretica に“戦時下のある国からのレポート”第4号、5号に掲載さる。

- 1949年 (64) “正字法について” 発表。
- 1950年 (65) デンマーク王より Ingenio arti 授与さる。  
『ファラー』出版、3月23日ラジオで放送。
- 1951年 (66) “銀板写真” 発表、1月1日・7日ラジオで放送。
- 1952年 (67) 出版界よりその年の月桂冠受ける。  
『枢機卿の第三の物語』出版  
『バベットのきょう宴』出版（すでにラジオで1950年11月24日朗読済。  
又、アメリカのレディズ・ジャーナルにて発表済）
- 1953年 (68) “夜のコペンハーゲンでの対話” Heretica 誌の最終号に掲載。  
“不死の物語” 俳優 Bodil Ipsen によりラジオで朗読さる。
- 1954年 (69) 『14年遅れの講演』出版、（すでに52年10月N・ザール師範学校でなされたもので、1953年ラジオで放送されたもの）（1939年コペンハーゲンで開催された国際婦人大会に講演を依頼され、ことわったことがある。）  
3月に短期間ストックホルム滞在、5月16～24日パリ滞在。
- 1955年 (70) 次の年にかけて、病状悪化、生きのびることは困難と思われた。  
『幽霊馬』Isak Dinesen の名で出版。（すでに50年12月15日 Ingeborg Bramus によってラジオで放送され、1951年アメリカのレイディズ・ジャーナル紙に掲載されたもの。）  
文部省より H.C.Andersen 賞受ける。70歳の誕生日（4月17日）挨拶を吹込み、作品“マント”放送、7月1日～4日、入院検査、7月27日手術、12月11日再度入院。
- 1956年 (71) 1月13日手術25日退院、5月ローマ訪問、クリスマス～正月休暇はフン島の親戚、Wedellsborg 城で過す。
- 1957年 (72) 『最後の物語』11月4日出版、ローマで祝い、その後パリ、ロンドンへ旅行。  
Henri Nathansens Mindelegat, デンマーク批評家の賞を受ける。  
アメリカン・アカデミーの名誉会員に推される。  
クリスマス～正月休暇はフンの親戚で。
- 1958年 (73) 3月病状悪化、しかし仕事は続く、Skæbne Anekdoter-Anecdotes of Destiny。〔運命の逸話〕10月13日発行、英語版、米語版も出る。  
5月24日～27日、弟とハムブルグに旧知人、最初のアフリカ行の船中で出会ったドイツ将軍 Paul von Lettow-Vorbeck を訪ねる。  
家、屋敷を如何に持ちつづけるかについて計画する。妹・弟2人と共に Rungstedfond とし公共のものとするため寄贈した。庭は鳥類保護区に指定さる。  
10月11日より出版社からの招待でアムステルダム旅行4日間、特別に用意された白馬に引かれた馬車で市中を行く。
- 1959年 (74) フォード・ファウンデーションの教育推進基金から招待でアメリカ訪問。

- 1月2日～4日、アメリカン・アカデミーなど各所で講演を行い、アサー・ミラーやマリリン・モンローなどとも会う。
- “王の手紙”“ヘロデ王のワイン”(バラバスに関するもの)“青い眼”などを物語る。途中1週間の入院などもあったが、誕生日に帰国の途につく。Henrik Pontoppidan 賞受ける。妹エレン死す。
- 1960年 (75) 「真実の復しゅう」マリオネット劇、ギョルデンダル出版社の劇場で上演、10月3日テレビ劇場でも上演。
- デンマーク・アカデミーの会員となる。
- 『草原の影』出版、英・米版も出る。
- Rungstedlund にセントラル・ヒーティング入れるなど修理が行われ、その間コペンハーゲンの南方、秘書の Clara Svendsen 宅へ移る。
- 仕事を続けるが、健康ますます悪化、6月には入院、病院の中で推稿、10月末退院、帰宅、クリスマス～正月の休暇は同じ親戚で過す。
- 1961年 (76) 6月25日、パリへ旅立つ、テレビのインタビューなどもあった。
- 7月9日帰宅、オルドス・ハックスレイなど客多し、クリスマスは家で祝う。
- 1962年 (77) モニカ・スターリング、パルメニア・ミーゲル、エクストロムなど多くの客来る。
- ピーター・ビアドのアフリカ滞在について話をきく、好きな本を何度も読んで過す。
- 前からねかしてあった仕事つづける。雑誌などに記事書く。
- 9月7日、モハメダンの休息にあたる金曜日午後五時死す。
- “我山に向いて目をあぐ……”が朗読され、アフリカを去る時に人にもらったトルコ石の銀の指輪と、アフリカ農園から持ち帰った一握りの土と共にエヴァルの丘に埋葬さる。

年譜作成に主として用いた参考文献

- Thomas Dinesen: *Tanne, min søster Karen Blixen*, Gyldendal, Copenhagen, 1974.
- Merete Klenow With: *Karen Blixen*, Gyldendal, Copenhagen, 1964.
- Parmenia Migel: *Titania* Random House, New York, 1967.
- Clara Svendsen: *Notater om Karen Blixen*, Gyldendal, Copenhagen, 1974.
- Errol Trzebinski: *Tilsidst talen tavsheden*, Lindhardt og Ringhof, Copenhagen, 1978.
- T. Brostrøm & J. Kistrup: *DANSK LITTERATUR HISTORIE*, Politikens Forlag, Copenhagen, Bind 4 (Tidstavle) 1971.